

【特別寄稿】加藤周一について知っているいくつかのこと

宇野 重規

筆者は生前の加藤周一に少なくとも二度会ったことがある。友人の三宅芳夫さん（現・千葉大学教授、社会思想史）が懇意にさせてくださっているということで、便乗してくっついて行ったというわけである。最初は、当時館長をされていた東京都立中央図書館、二度目は自由が丘であったと記憶している。

大学院に入り、研究者の道に入ったばかりの頃である。一応はフランス政治思想史を専攻しようと決めたものの、まだ海のものとも山のものとも定まらない筆者を、加藤さん（以後、あえてそう呼ばせていただく）は暖かく迎えて下さった。学生時代、『羊の歌』を読んで憧れた「ザ・日本の知識人」に会えると緊張したが、第一印象は良い意味で「書生っぽい人」であった。

少し説明しよう。大学院に入って以降、著名な研究者にお目にかかる機会も少しずつ増えていたが、はるか年長者に声をかけることにはかなりの勇気を要した時代である。今となっては昔話であるが、当時のアカデミズムにはまだ、「権威」の空気が存在した。若い院生にとって、「大先生」に気安く話しかけられる雰囲気ではなかったのである。

ところが、加藤さんはとてもフラットな方であった。筆者にせよ、三宅さんにせよ、加藤さんからすれば、学部生に毛が生えたくらいのものだったはずだ。それなのに、加藤さんはこちらを対等な議論の相手として遇して下さったのである（今思えば、若き日の思い上がりによる錯覚だろうが）。その話ぶりは、「自分はこう思うが、どうだ」という感じで、兄貴

分が年少の仲間に語りかけているようだった。

当時、フランスが南太平洋で核実験を行なったことが問題になっていた。当然、加藤さんは批判的であろうと思い、そのことを話題にすると、意外にも加藤さんはドゴール以来のフランス外交の話を始められた。アメリカや旧ソ連に対して独自の立場を維持しようとしてきたフランスにとって、核が持った意味を論じられたのである。

加藤さんも決して「フランスの核実験は正しい」とは思ってはいなかったはずだ。それでも、少なくとも、そう単純に判断できる問題ではないということを論ずるように話されたことをよく覚えている。そんな時の話し振りが、やはり「大先生」が解説するというより、年長の「兄貴分」が、「そうは言うけど、いろいろな側面があるんだぜ」という感じだった。

自由が丘では夕食をご一緒させていただくことになった。お気に入りの店に連れて行って下さったのだが、あいにくそこはお休みであった。加藤さんはそういうとき、どこでもいから適当な店に行くという人ではなかった。あちこちを巡りに巡り、ついに「ここにしよう」と入ったお店で、加藤さんが満足げに分厚い肉を平らげていたのが印象的だった。加藤さんは健啖家であった。よく食べ、よく話す人だった。

その後、朝日新聞の紙上で連載「夕陽妄語」を読むことはあっても、再び直接お目にかかる機会がないままに、加藤さんは亡くなってしまった。そのことを残念に思っていたところ、不思議なところで再びご縁が繋がった。筆者がベルリン自由大学で講義をするため、ドイツに4ヶ月ほど滞在したときのことである。

思えば加藤さんは1960年代末から70年代初頭にかけて、この大学で講義をされている。この時期の講義ノートを元に書かれたのが『日本文学史序説』（現在はちくま学芸文庫）であることを思い出し、旅行カバンに入れて行くことにした。日本において文学が歴史的にはたした役割（それは同時に思想的表現であり、哲学であり、美の表明であった）から語り起こす

この概説書は、同時に日本思想史であり、日本政治史・社会史でもあった。

この本は実に明快に描かれている。文学を通じて日本の政治・社会構造、海外からの文化受容のパターンが生き生きと理解できるように編まれており、明らかに海外の読者が強く意識されている。しかしながらそのことは決して「日本早わかり」の類であることを意味しない。むしろ加藤さんが海外の学生と対話をしながら、「外からの」眼で日本社会とその文化を構造的に捉えようとしたことは、そこに他者の視線が組み込まれているという意味で、極めてユニークな日本論に結実している。

加藤さんのいろいろな分野での業績は今後も継承されて行くだらう。しかし、筆者にとって最も愛着があるのは、加藤さんが海外の学生に「俺は日本社会の特質をこう捉えているのだが、どう思う」と対話する様子が目に浮かぶ、この著作である。

(うの しげき 東京大学教授)

